

前頭葉は脳血管障害・頭部外傷を初め種々の疾患により障害を受けるが、同部は記憶や注意、行動・行為に関係しているため、リハビリテーションの観点からは非常に重要な部位といえる。しかしながら前頭葉の障害に関しては、神経心理・神経生理などの面からアプローチされているが、そのリハビリテーションについては残念ながらほとんど確立されていないのが現状である。そこで今回は、リハビリテーションに必要な前頭葉の機能解剖・画像診断・評価に関しての概説の後に、そのリハビリテーションの現状と問題点に関しては、4例の症例報告を交える形で、特集として取り上げてみることにした。

■ **前頭葉の機能解剖** 先ず前頭葉の外側面、内側面、底面が示されているので、本特集の全体の理解のために参考にされたい。次に機能解剖であるが、前頭葉はわれわれの「行い」全てに関わっているため、これを機能の内容によって分類することは不可能である。したがって、臨床症状と前頭葉の部位との対応から解説が加えられている。特に臨床症状としては、「言語」、「行動・行為・運動」、「情動・人格変化」などが取り上げられている。(望月 聡氏ら、513頁)

■ **前頭葉障害の画像診断** 画像診断は中枢神経の病変の部位診断・存在診断・質的診断に不可欠であるが、特にMRIはコントラスト分解能が高く、多断面の画像が容易に得られるため、その価値が大きい。本稿ではMRIによる前頭葉の横断像・矢状断像・冠状断像の正常解剖が、解剖学的ランドマークを含めて解説された後、幾つかの前頭葉病変のMRI像が呈示されている。(平井俊範氏ら、519頁)

■ **前頭葉機能障害の神経心理学的検査法** 前頭葉はあらゆる高次神経・精神機能と関係しているため、その症状は「……機能の障害」というよりも、種々の機能領域に共通のいわば「障害の形式」として取り出されるべきものである。本稿ではこのような観点から、前頭葉の4つの「障害の形式」とその検査法が解説されている。併せて、著者らが日本語版を開発中の「BADS：遂行機能障害症候群の行動評価法」も紹介されている。(鹿島晴雄氏ら、525頁)

■ **前頭葉障害のリハビリテーション** 最近、前頭葉障害という用語に替わり、「個々の認知機能そのものは正常であるが、その認知機能を用いて行動を開始し、モニターとして行動を制御していく機能の障害」と定義される遂行機能障害という概念が用いられるようになってきている。前頭葉障害患者のリハビリテーションについては、系統的プログラムはほとんど確立されていないが、遂行機能障害に対する理論的治療モデルの提案により、ようやく治療効果が論じられる段階に達してきている。本稿では言語的媒介による行動の調整、問題解決訓練などの遂行機能障害に対する治療プログラムが解説されている。(原 寛美氏、533頁)

■ **症例報告** 上記のように前頭葉のリハビリテーションは未成熟の状態であるため、症例としての提示の積み重ねが特に大切となる。今回は4人の著者に症例報告をお願いしたが、復職・再就職に関する問題、在宅生活上の課題ならびにアプローチの問題、従来の前頭葉機能検査では成績低下の認められないケースの問題などが指摘されており、前頭葉障害に対するアプローチの難しさが痛感される。(蜂須賀研二氏ら、541頁；高岡 徹氏ら、545頁；布谷芳久氏ら、549頁；加藤元一郎氏ら、553頁)